

Title	40 ニホンザルの性腺機能調節における成長因子の役割 (X.共同利用研究 2.研究成果)
Author(s)	田谷, 一善; 葛西, 秀美; 黒田, まほ; 伊藤, 麻里子; 清水, 慶子
Citation	霊長類研究所年報 (2005), 35: 116-116
Issue Date	2005-08-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/166091">http://hdl.handle.net/2433/166091</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

この社会交渉の特徴として、年長者と年少者では、マウンティングを行うのは年長者、グルーミングを開始して総体的に長く行うのは年少者であった。マウンティングには、両者間の緊張を解消し、近接状態を安定化させるという働きがあると言われている。また、グルーミングには、親和的關係を維持するという働きがある。年少者は年長者に対して、マウンティングとグルーミングを行うことで、積極的に親和關係の形成を試みている可能性が高いと考えられる。

本研究では、1頭または少数で移動する群れ外オスの長期追跡は困難であり、わずかな観察時間しか得られなかったが、この間にオスのグルーピング過程など様々な興味深い行動を観察できたため、大きな成果をあげることができた。

### 37 嵐山のニホンザルにおける近接・相互行為からみた雌雄個体間關係と雄の生活史

花村俊吉（京都大・理）

ニホンザルの群れにいるオスは、群れを構成する多くの個体から離れている（周辺にいる）オスと、多くの個体の近くにいる（中心にいる）オスとに分化して観察される。このオスの空間的位置は移行し、オスの生活史としての側面もある。しかし、その分化機構や移行過程はよく分かっていない。本研究では、他個体との相互行為の積み重ねとしてオスの空間的位置の差異が観察されると考え、嵐山のニホンザル餌づけ群のオトナオス 9 頭を対象に個体追跡を行い、他個体との相互行為、オスの空間的位置を調べた。その結果、メスとの相互行為によって頻繁に逃避するオスが群れの周辺にいることが明らかになった。その際、メスの悲鳴によってオスが第三者に攻撃されることがあり、こういった状況をもたらし得るメスから逃避していることが示唆された。また、周辺にいるオスは、毛づくろいや長時間近接をするメスからは逃避せず、それらのメスとの近接時には逃避頻度が低くなる傾向があり、特定のメスとの近接によってオスの空間的位置の移行が促される可能性が示唆された。したがって、オスの空間的位置にはメスとの社會關係が強く影響していると考えられる。サル自身に群れという境界がどのように捉えられているかにもよるが、メスとの社會關係が、オスの空間的位置の移行、群れへの移出入といった生活史の変化に及ぼす影響をさらに検討する必要がある。

### 40 ニホンザルの性腺機能調節における成長因子の役割

田谷一善、葛西秀美、黒田まほ（東京農工大・農・獣医生理）、伊藤麻里子、清水慶子（京都大・霊長研）

#### ① 泌乳ニホンザルの卵巣機能抑制現象

子ザルを哺育中のニホンザルは、繁殖季節中に排卵が抑制される。このような泌乳による卵巣機能抑制の機構を内分泌学的に研究した結果、泌乳期全期間を通して下垂体からの卵胞刺激ホルモン（FSH）、黄体形成ホルモン（LH）の分泌が抑制され、その結果として、卵巣からインヒビン、エストラジオール及びプロゲステロン分泌が低下する事実を明らかにした。一方、副腎皮質からのコルチゾール分泌量は増加していることから、子ザルの吸乳刺激により繁殖期間中にもかかわらず視床下部・下垂体・副腎軸（CRH-ACTH-Cortisol）が活性化され視床下部・下垂体・卵巣軸が抑制された結果であろうと推察された。

#### ② ニホンザル胎盤からのレプチン分泌

レプチンは、主に白色脂肪細胞から分泌されるホルモンとして知られているが、ヒトでは胎盤からも分泌される。レプチンは、性成熟や妊娠維持との関連、ステロイドホルモンとの相互作用など、生殖機能との関連が深い。本研究では、ニホンザル胎盤組織におけるレプチンの局在を免疫組織化学により検討した結果、栄養膜合胞体層にレプチンの局在を認めた。以上の結果から、ニホンザルでも妊娠中にレプチンが胎盤から分泌されるものと推察された。